TM
Life field of Creation

阿伎留神社奥宮琴平神社の大岩

『大物主大神の磐座！』探訪記

平成26年10月5日　奉祝　ご成婚！

『　時を経て　出雲の鳥が　籠を立つ　仲をとりもつ　神の磐座　』

05-Oct-2014

All rights reserved by Gainendesign Labo. Taizan 2014

586 Takakura Fujisawa-shi Kanagawa-ken Japan 252-0802
Tel/Fax　0466-43-4713 Email　taizan@gainendesign.com　HP　http://www.gainendesign.com/

探訪の趣旨

ここ2年ほど年齢のせいか体のあちらこちらにガタが来て、在住の神奈川県藤沢市から遠出をする探訪がおろそかになっていた。リハビリを兼ねて近隣の神社周りなどをしているのだが、どういうわけか出雲系の熊野神社、山王神社、琴平神社、諏訪神社などに行く機会が実に多い。

神様系の話になると勢い多元的かつ重層的にならざるを得ず、一つ一つを論拠を以て語るのが本筋ではあるのだが、そのための知力や体力に欠けるのが偽らざる状況なので、ここでの話は体験的・感性的な認識レベルであるということをご理解頂いたうえで、探訪記にご傾聴たまわりたい。

昨年初に死の淵を覗き見る経験をしたが、それも無事やり過ごせた。そのお蔭は間違いなく出雲系の神々のご加護であったように思う。具体的には大國魂神社の御祭神である大国魂大神、豊玉姫神社の御祭神である豊玉姫命の二柱の神である。大国魂大神とは奈良桜井の御神体山三輪山の鎮まる神である大物主大神と同一神、豊玉姫命は南九州市知覧町に鎮まる神である。“お蔭様”のお話は理論ではなく実体験である。そのお話の詳細はここでは差し控えたい。

豊玉姫命の父神は海神大綿津見神；豊玉彦であり、姫はそののち初代天皇である神武天皇すなわち神倭伊波礼琵古命の祖母となられる方である。と言っても天津神系の瓊瓊杵尊系譜の男系血筋というよりは、その系譜に嫁した女系の神々ということになる。つまり瓊瓊杵尊の妻には南さつま市金峰山麓下の阿多より阿多津姫が、瓊瓊杵尊の息子の山幸彦；彦火火出見尊の妻に豊玉姫が、その息子の鵜草葺不合命の妻に豊玉姫の妹の玉依姫が嫁している。すなわち天津系の天皇家男系の大本の血筋に南九州の女神が嫁しているという構造になる。

さて、そこで大切なことは豊玉彦、豊玉姫に冠された“豊”であって、このルーツは山陰・機内の出雲系になるという説があり、私はいたく得心している。つまり大物主大神も豊玉姫命も同じ出雲系統の神々ということであり、不肖私泰山は出雲系の神々のご加護により生かして頂いているということであり、そのことは非常にありがたく嬉しいことで、同時に三輪山の奥津磐座から感応した私にとってはこの上なく重要なことなのだ。

いささか前置きが長くなったが、熊野と琴平について若干触れておきたい。全国各所にある熊野神社であるがその大本である熊野大社には二つあり、一つは和歌山にある熊野本宮大社、もう一つは島根にある熊野大社である。それぞれの主祭神は公式には家都美御子大神と神祖熊野大神櫛御気野命である。さてここで注意しなければならないことは公式には両方ともに主祭神は素戔嗚尊としてあるのだが、古代、“神；カミ”とはスサノウを指し、“大神；オオカミ”とはニギハヤヒを指す尊称であったとも言われる。また後者の“櫛”はニギハヤヒを表すものでもある。そのでんで言えば、熊野本宮大社も熊野大社も主祭神は後の大物主大神；天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊を祀った神社であり、スサノウを凌ぐ大王であったニギハヤヒの栄光を称えるものであったのではなかろうか、などと勝手な見方をしている。

熊野神社は熊野大権現とも称されるが、熊野神社の御祭神は主祭神が熊野事解男（ニギハヤヒのこと）であり、その祖父神の熊野牟須美大神、父神の速玉之男神＝スサノウであるという理解が体感的に最も得心が行く。熊野と言えば、この3柱の神々を想起し、しかもその中心にニギハヤヒを置いて尊崇する…というのが私の熊野神社への向かい方である。

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

探訪の趣旨-続き

和歌山の熊野本宮大社の奥宮が玉置神社の玉石社である。また、新宮の熊野速玉大社の奥宮は少し離れたところにある神倉神社で実はここの御祭神は高倉下命で、この神はニギハヤヒノミコトの子供（別名：天香久山命）である。熊野速玉大社の主祭神は熊野速玉大神と熊野夫須美大神であるとされるが、前者はニギハヤヒの父神スサノウ、後者は祖父神にあたる。（ニギハヤヒとニギハヤヒノミコトとの使い分けに特別な意図はない。）

島根県出雲市の熊野大社にも奥宮があり、現在は熊野山あるいは天宮山という。その頂上には熊野大神の磐座と呼ばれる巨岩があり、後方の御神体山と磐座とのセット構造を考えるに、熊野大社も主祭神はニギハヤヒであると考えられる。個人的体感ではその方がすんなりと受け入れやすい。

大物主大神が饒速日命（ニギハヤヒノミコト）であることは以前より各所で指摘されているが、私もその説に同感で、結論を急げばニギハヤヒノミコトとは大物主大神であり、また讃岐金毘羅宮の御祭神でもある。金毘羅宮では主祭神は大物主命。（原田常治氏の説を支持；古代日本正史）

讃岐の金刀比羅宮にも実は奥宮があって、その山を琴平山・象頭山といい、後掲の写真のような岩塊による磐座がある。これも同じ構造である。

大物主大神が大国主といわれることがあるが、大国主は役職名のような気がする。大きな国を治める者という意味では、ニギハヤヒもしかり、スサノウの末子と結婚したもう一人のオオクニヌシ（外国神と思われ、少彦名と常に一緒）も大国主であるのではなかろうか。

さてようやく本題に入れそうだ。ここ2年間の近隣熊野神社詣での中で、ふと大物主大神を祀る神社が近隣にないものかと思い始めた。大物主大神という切り口には、三輪山で経験したように、明らかに「山」「磐座」「神霊」というキーワードが絡みつく。ニギハヤヒが神武天皇以前の大王であったとするならば、同体ではありながら、大物主大神の存在は目には見えない世界を取り仕切る神霊界の大王というイメージが私にはある。果たして、そのような神社が東京にあるのだ。

東京といっても、みなさんが思い描くように東京は大都会だけではない。23区を一歩出れば、田園有り、深山有りの世界が広がる。東京郊外にあきる野市という町があり、その奥の方にJR東日本五日市線の武蔵五日市というターミナル駅がある。要するにここで電車は終わる。ここからさらに30分も西にクルマで向かえば秋川渓谷や桧原村がある。まさに深山幽谷なのである。

ここへのアクセスは極めて悪く、小生のところからだと一端新宿に出て中央線で拝島まで出て、さらに五日市線に乗ることになり、電車だけで3時間位はゆうにかかる旅程である。…ところが、平成26年6月末、圏央道がほぼ開通し、海老名ICから乗れば、西八王子ICまでが25分、そこから20分で武蔵五日市駅に着く。家を出てから何と1時間強でたどり着ける。

この山深きあきる野市の一隅に阿伎留（あきる）神社があり、その主祭神が大物主神（神社の記載では大神ではなく神）なのである。そして阿伎留神社の北西方向徒歩で1時間ほどのところに金比羅山がありその頂上付近に奥宮である琴平神社があって、その御神体がパワフルこの上ない大岩なのである。

この琴平神社の御祭神は大物主神であり、その御神体が後方の巨大磐座なのである。そこを探訪してきた。以下、大物主神という表記は阿伎留神社、琴平神社に関係する場合、それを用いる。

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

大物主大神と味耜高彦根神がなぜ一緒に？

阿伎留神社には主祭神の大物主神と一緒に味耜高彦根神（あぢすきたかひこね）が祀られているが、この組み合わせは珍しい。

味耜高彦根神はまたの名を迦毛大御神（かもおおみかみ）といわれ奈良県御所市の高鴨神社の主祭神である。高鴨神社の由来記にははっきりと高鴨神社の三柱の神すなわち、味耜高彦根神、下照姫、事代主を合わせて八咫烏というと書いてある。この八咫烏が熊野の地で神武天皇を迎え、大和に導いたとされているが、おそらくその地こそ新宮市にある神倉神社であろう。神倉神社の御神体であるごとびき岩は海上から良く見え、灯台の代わりになる。神倉神社の伝聞にもそのような記述が読み取れ、しかも神武天皇（イワレヒコ）、八咫烏が出会ったであろう神倉神社の御祭神がニギハヤヒの息子の高倉下命なのである。イワレヒコの大和入りにはニギハヤヒは当初から理解を示したが、ニギハヤヒの義兄の長脛彦が反対をしている。この仲介の労をとったのが、八咫烏としての出雲系譜のオオクニヌシと日向系譜のタギリヒメの子である味耜高彦根神であり、一方で、出雲系譜の大和の大王ニギハヤヒの子供である高倉下命があるというところが非常に重要で、これにより平和裏に天皇家のルーツが統一されたのである。ここで言及したニギハヤヒすなわち大物主神と、味耜高彦根神が阿伎留神社には合祀されているのである。

公式な伝聞では、味耜高彦根神は大国主命と宗像三女神の長女である多紀理毘売命（田心姫、田霧姫とも…）との子供で、妹は下照姫である。味耜高彦根神を主祭神としてつとに有名なのが奈良県の高鴨神社で、2008年の降雪した早朝にここを訪ねたことがあるが大変神々しく品位の高い神社であったことを覚えている。多紀理毘売命は三姉妹で次女が多岐都比売命、三女が市寸島比売命で、三女は厳島神社の御祭神である。

この場合の大国主命はスサノウの末子である須勢理毘売命を正妻とした神で、その大国主命が九州で別の女神に産ませたのが味耜高彦根神であるという構図を示している。この時点で大物主神と味耜高彦根神とは何らのつながりもなく、なぜ阿伎留神社で合祀されているのかが謎である。

そこで仮に大物主大神＝大国主命であると同神説をとればこれは一挙に解決するが、スサノウの第５子であるニギハヤヒがスサノウの末子の入り婿であるオオクニヌシと同神であるするのは受け入れにくい話でもある。やはり大国主命に該当する人物は複数あって、その一つが第一大国主命ともいうべき大物主大神すなわちニギハヤヒ、第二大国主命がスセリヒメの夫であるもう一人のオオクニヌシとするのがよいのかもしれない。とりあえず大物主大神と味耜高彦根神の関係の謎解きは今後の課題としたい。いずれにせよ阿伎留神社での両神の合祀は厳然たる事実である。

さて以上のような状況を踏まえつつ、阿伎留神社の奥宮である琴平神社を訪ねた。

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

熊野大社

所在地；島根県松江市八雲町熊野2451番　主祭神；熊野大神櫛御気野命　1993年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

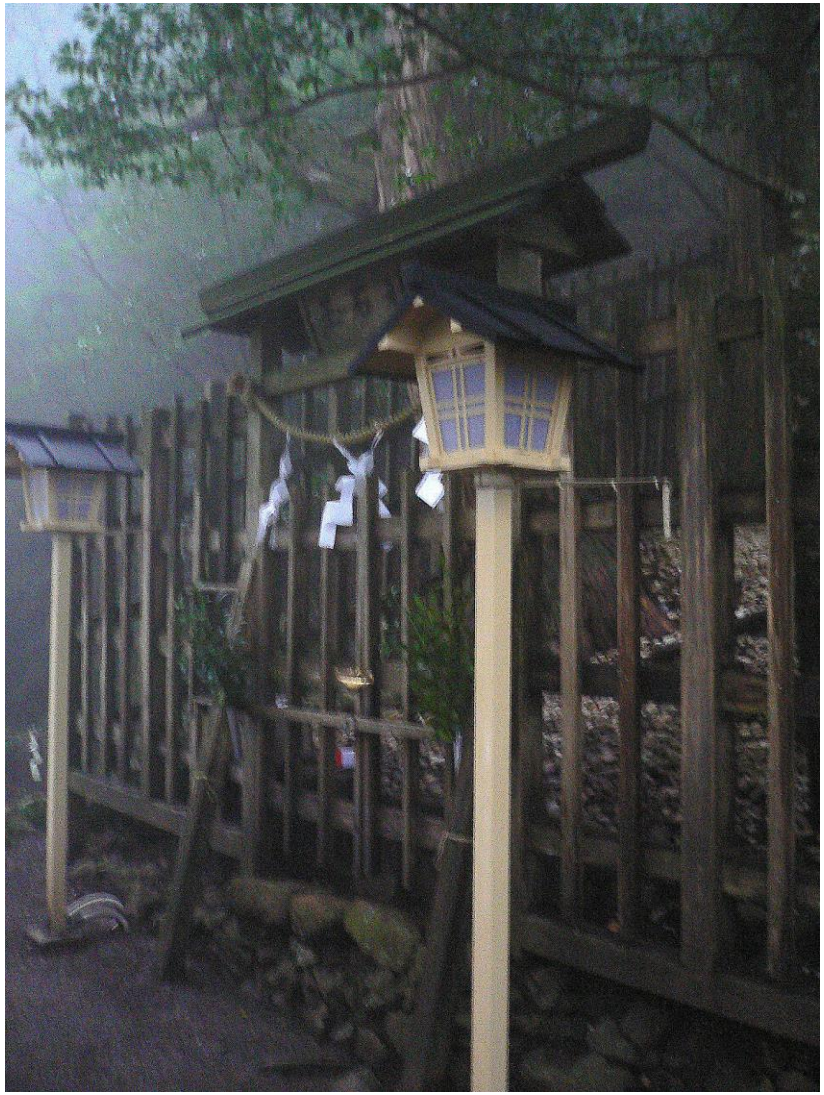
熊野本宮大社

所在地；和歌山県田辺市本宮町本宮1100　主祭神；家都美御子大神　1971年、2007年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

玉置神社玉石社

所在地；奈良県吉野郡十津川村玉置川1　主祭神；国之常立神　2007年参拝



CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

熊野速玉大社、神倉神社ごとびき岩

所在地；和歌山県新宮市新宮1　主祭神；熊野速玉大神、熊野夫須美大神　2007年参拝
所在地；和歌山県新宮市神倉1-13-8　主祭神；高倉下命、天照大神、2007年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

高鴨神社

所在地；奈良県御所市鴨神1110　主祭神；阿治須岐高日子根命、下照姫、事代主　2008年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

高鴨神社の御祭神

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

八咫烏神社

所在地；奈良県宇陀市榛原高塚42　主祭神；建角身命＝阿治須岐高日子根命　2008年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

豊玉姫神社

所在地；鹿児島県南九州市知覧町郡16510　主祭神；豊玉姫命　2009年、2012年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

金毘羅宮（琴平宮）

所在地；香川県仲多度郡琴平町字川西892番地1　主祭神；大物主命　2008年参拝

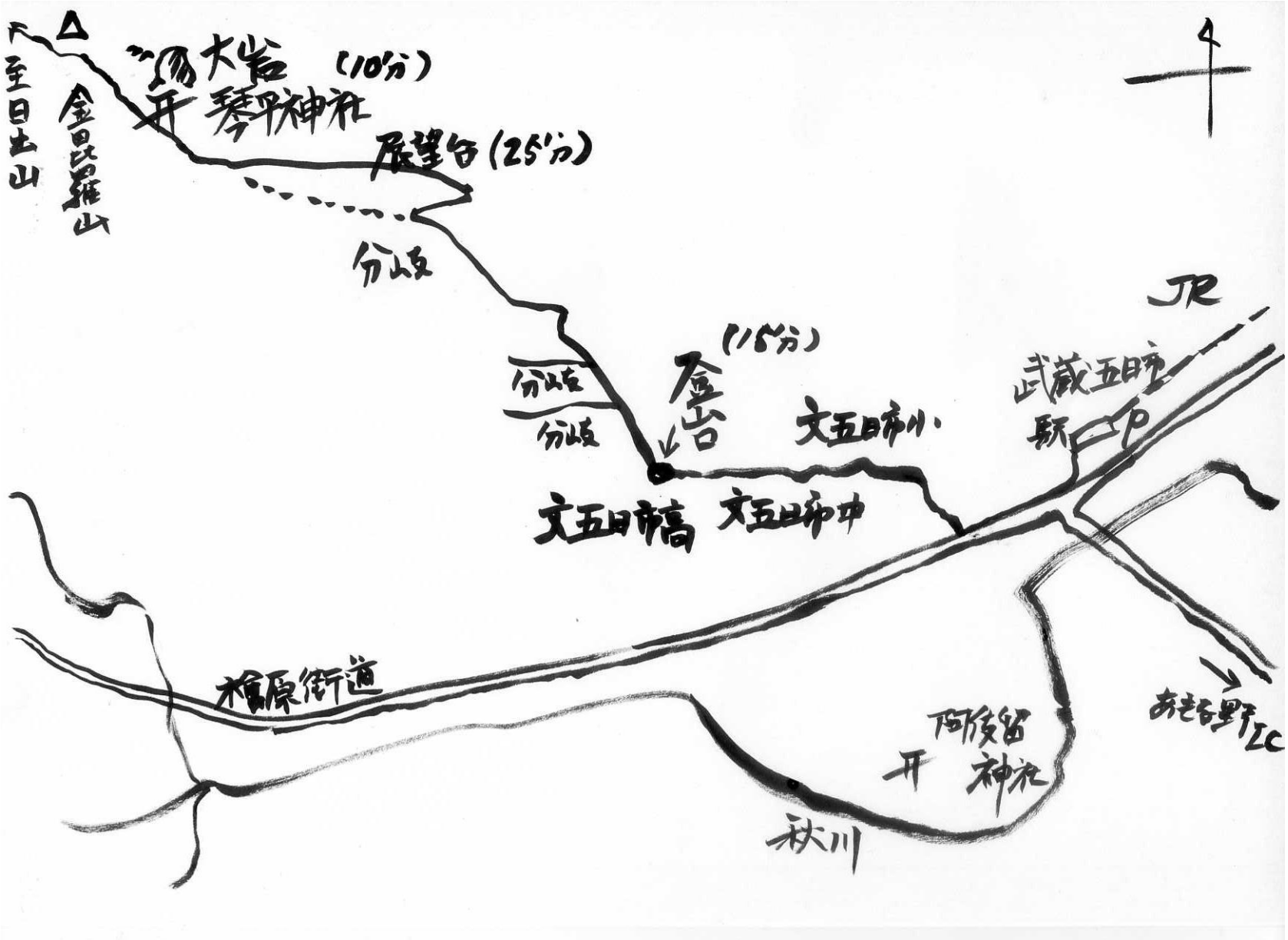
CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

金毘羅宮の奥社厳魂神社と磐座

所在地；香川県仲多度郡琴平町字川西892番地1　主祭神；厳魂彦命　2008年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社と大物主の大岩の位置関係



CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

阿伎留神社

所在地；東京都あきる野市五日市1081　主祭神；大物主神、味耜高彦根神、建夷鳥神、天児屋根命　2014年参拝

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社；阿伎留神社奥宮

所在地；東京都あきる野市五日市金比羅山山頂付近　主祭神；大物主神　2014年参拝

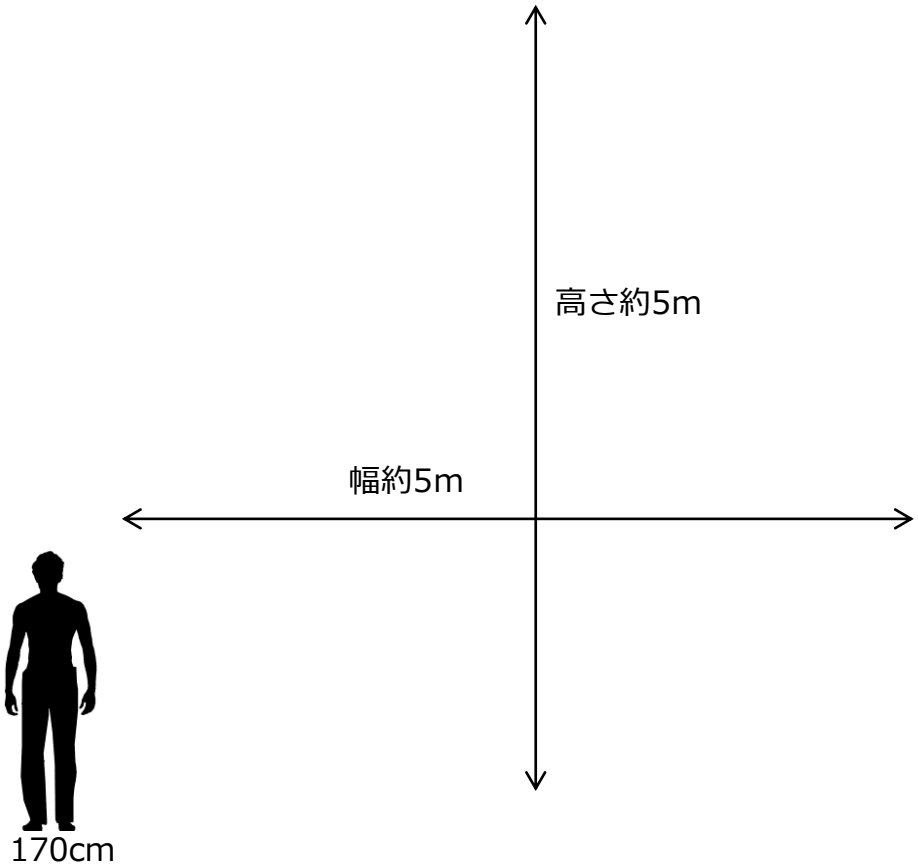
CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩

これが大物主神の磐座だ！琴平神社裏手30mほどにあり、その威容はすぐに目に飛び込んでくる。

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

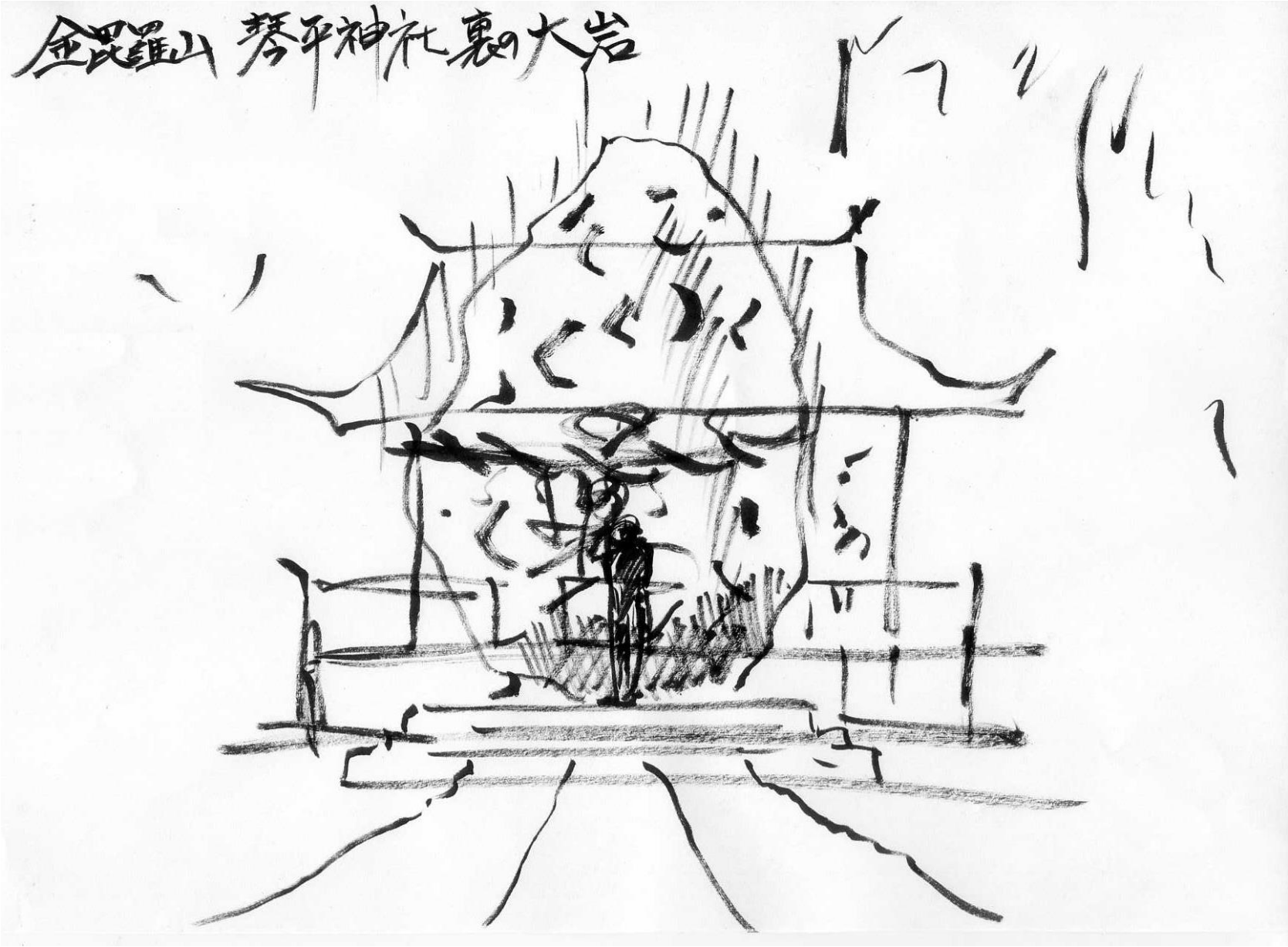
琴平神社の御神体大岩の現況



岩質；チャートの一枚岩に割れ目多数
構造；手前の平坦部を入れて一塊の巨大岩盤
祭祀；大岩手前に石の祠、注連縄あり
金毘羅尾根の先端部分の稜線がこの岩塊になっている。
後方に明らかな人的加工痕跡および祭祀のなごりあり。
後方の巨石頂上には像が安置されている。
垂直面の方向は東南に向いており、阿伎留神社に向く。
周辺はかなり急峻な崖で回り込むのは大変

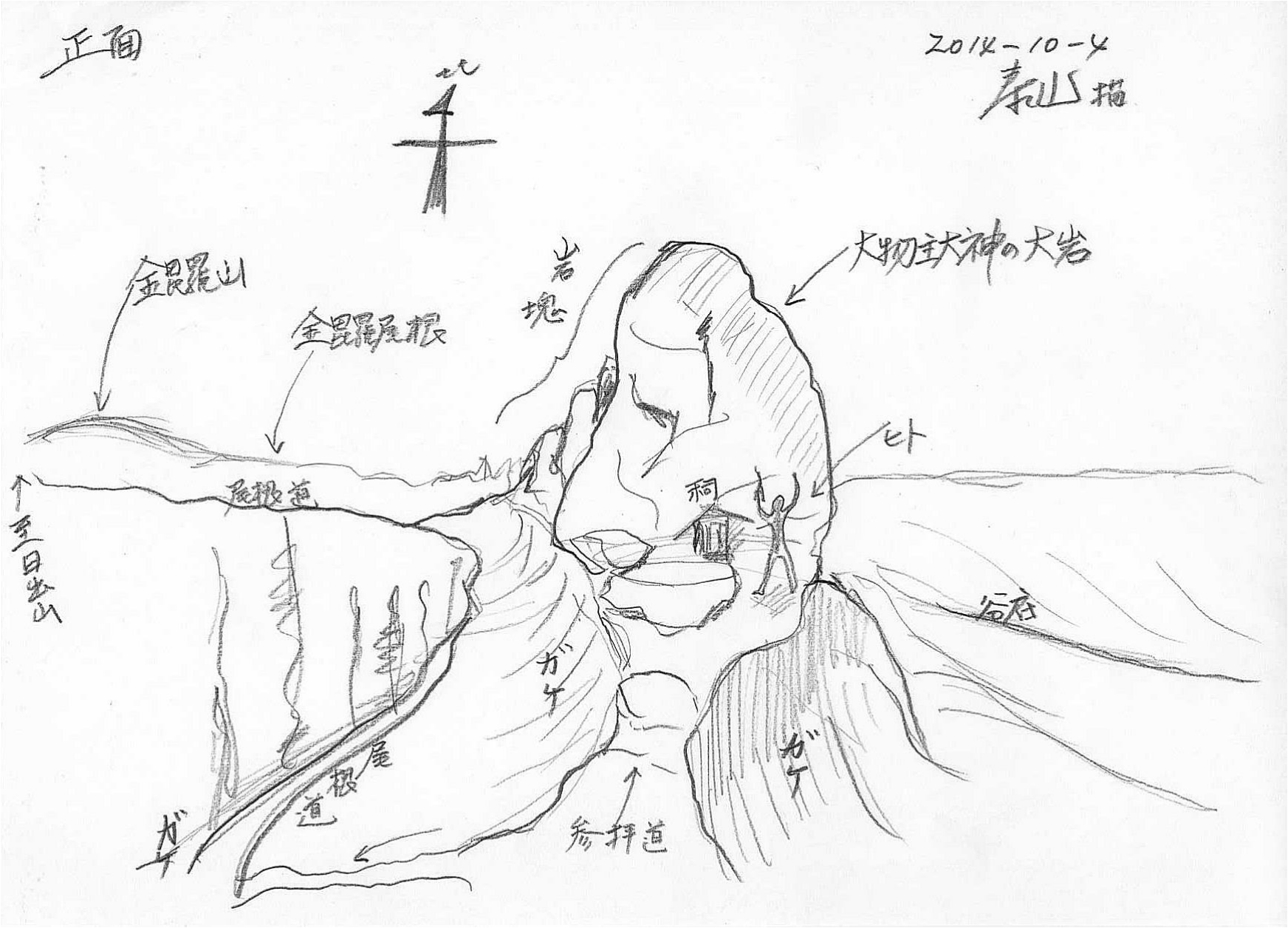
CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩イメージイラスト



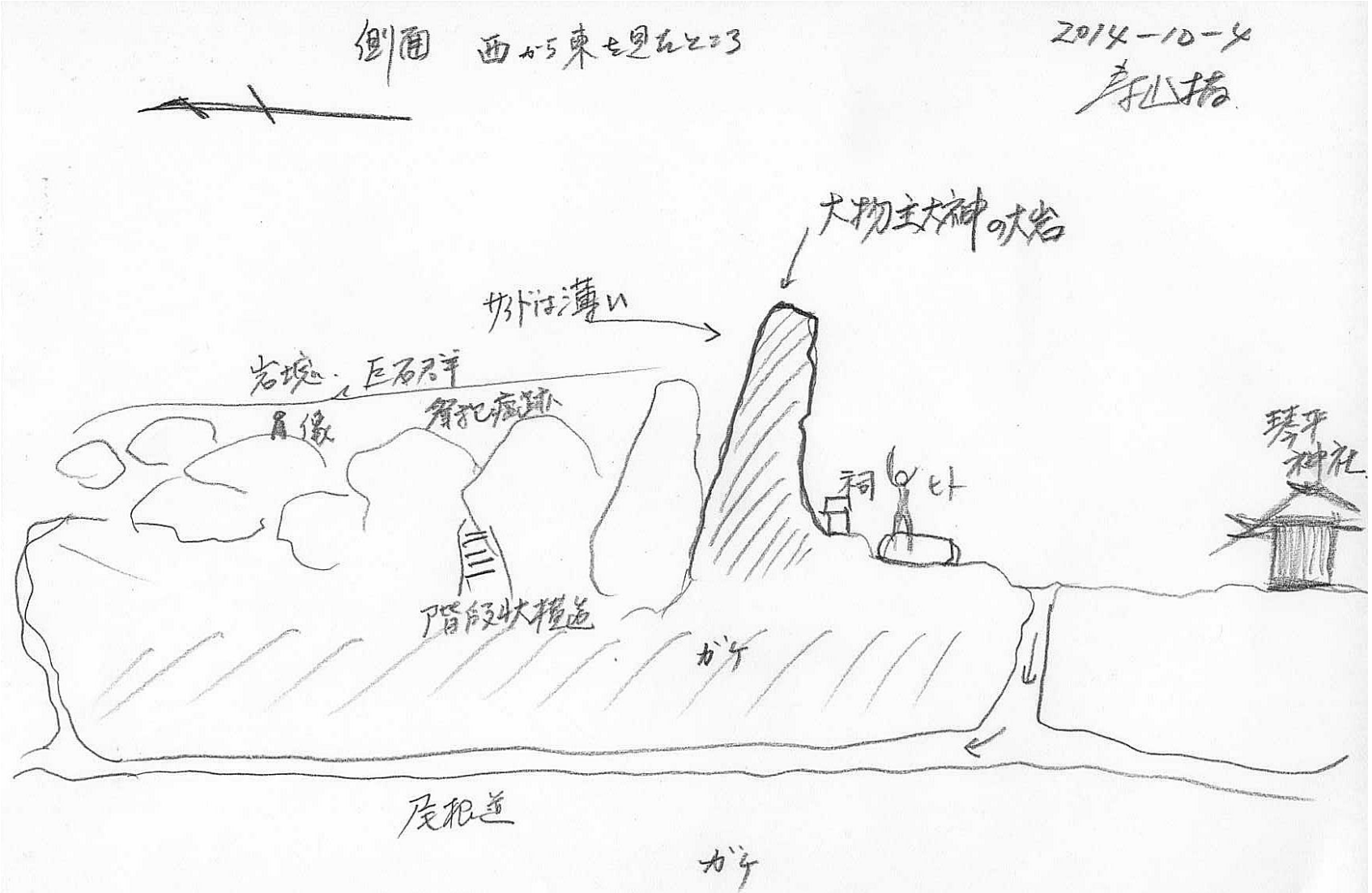
CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩イラスト正面



CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩イラスト側面

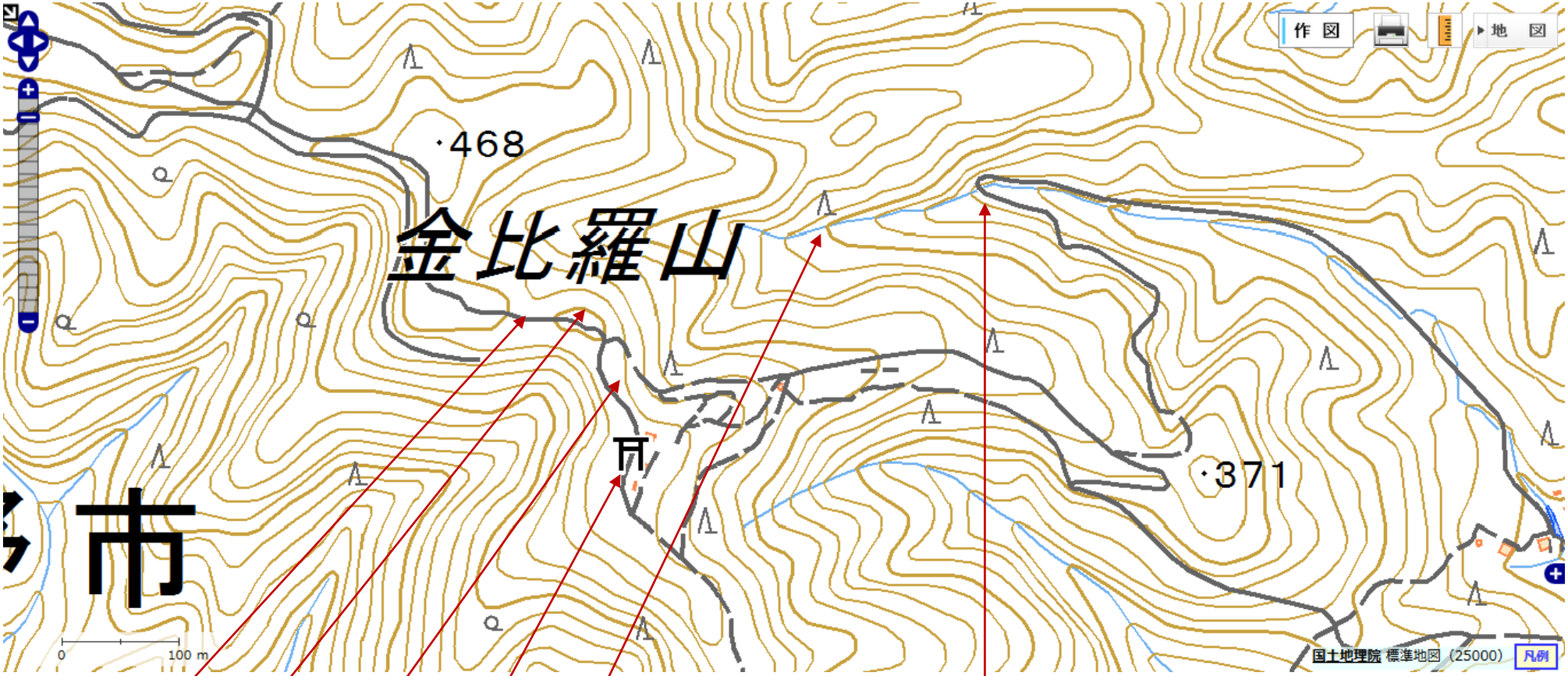


＊大物主大神の磐座は金毘羅尾根の岩塊の最先端部分である。
＊大岩の側面は予想外に薄い。これは茨城県の加波山頂上で見た衝立状の巨石に似ている。
＊大岩は単独岩ではなく、その下に根があるチャート岩塊の一部である。

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社周辺の地形図

金毘羅尾根の両側はかなり急峻な崖で、東側の樽沢にはダムのような巨岩；ククリ岩があるといわれる。



樽沢上流部のククリ岩

琴平神社

大物主大神の大岩

大岩後方の祭祀場痕跡

樽沢

樽沢方面へ下る分岐点

出典；国土地理院　電子国土ウエッブ　2014
矢印、解説を朱記で著者が補足

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の位置

出典；国土地理院　電子国土ウエッブ　2014
丸印、解説を朱記で著者が補足

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体の北西にあるもの

霊峰御岳山のほぼ東南方向に琴平神社と大岩が位置する。金毘羅尾根もこの方向に走り、その先端部分の岩塊が大物主大神の磐座になっている。東南の方向に阿伎留神社がある。

出典；国土地理院　電子国土ウエッブ　2014
丸印、丸印、解説を朱記で著者が補足

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩周辺

大物主大神の磐座の側面写真；かなり薄い

大岩東側の樽沢に落ちる崖；極めて急峻

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

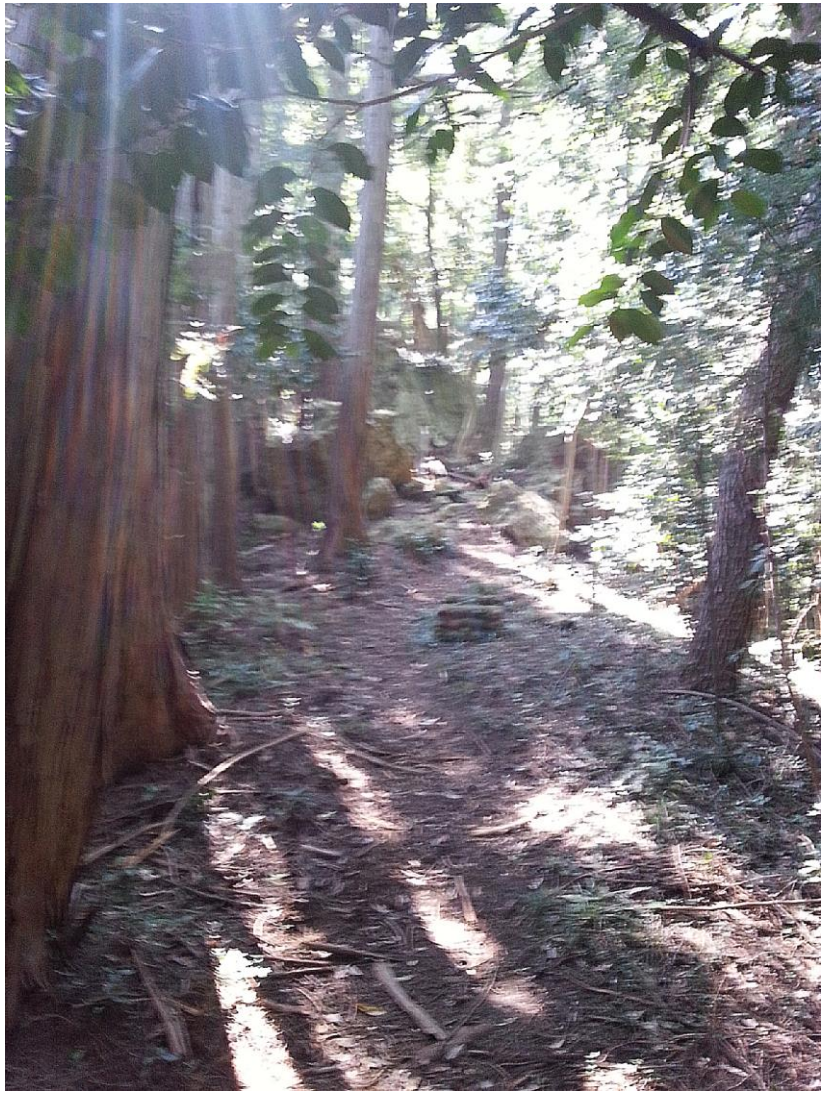
琴平神社の御神体大岩周辺

大岩後方すぐに明らかに階段状の構造物がある

さらに後方には巨石による天蓋で人工的な洞がある

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩周辺



大岩後方には逆方向から登れる

大岩後方の岩塊頂上部には観音像らしき設置物がある

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社の御神体大岩周辺

大岩より北方約100m付近から大岩方向に登れ、広めの祭祀痕跡場が認められる

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com

琴平神社大物主大神の磐座の考察

関東の一角でしかも東京郊外にこれほどのパワフルな磐座があるとは思わなかった。しばし健康上の理由から巨石やピラミッド山の探訪から遠ざかっていたこの頃であるが、まことに時宜を得て、しかも崇敬する大物主大神の磐座に触れることができ、最近にない喜びに満ちている。

奇しくもこの10月5日に千数百年ぶりの大いなる吉事が起こった。それは高円宮典子女王殿下が出雲大社宮司家千家国麿氏のもとへ嫁がれたことである。

約2000年近くも前に、日本ではそれまで大和を治めていた出雲系の神々がゆえ合って九州日向系の天皇家の祖である神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）に大和の統治を譲ってこの方、出雲系の女神が天王家へ嫁すというのが当然の仕組みとなり、それこそがまさに「国譲りの深層」であるとおもうのだが、平成26年10月5日を以てその仕組みが大きく生まれ変わることになるのではないか…そのように思えてならない。

裏に隠れ、籠の鳥となった出雲の神々が籠を抜けて天に舞う秋（とき）が来たかのようだ。出雲の神々の大王とは大物主大神であって、すなわち三輪山に鎮まる巨神、ニギハヤヒノミコトその方に違いない。

琴平神社の御神体である大物主神の大岩を前に心静かに大いに癒される次第であった。

裏が表に返り咲くというがごとき単純な歴史の後戻りの意味では決してない。籠から飛び立った出雲の神々と天皇家の神々との協働により、新たな世界観が築かれるということである…と解している。

そのとき調和のための装置に、大物主神の磐座のような巨石や御神体山がおそらくなるのではないか。密やかにそう願う次第である。

『　時を経て　出雲の鳥が　籠を立つ　仲をとりもつ　神の磐座　』

大物主大神すなわちニギハヤヒの関わる場所には数多の磐座が認められる。その頂点に三輪山がある。ニギハヤヒの磐座は調和と創造の象徴であり時代展開の軸でもあろう。それはニギハヤヒ大王ご自身がそうなのであるからと思うからだ。今回の阿伎留神社探訪はまさにそのことの確認のためのものだった。

阿伎留神社からは北西に金比羅山と琴平神社が遥拝され、そのさらに北西遠方には霊峰御岳山の奥宮男具那社がある。男具那の峯は明らかにピラミッド山で、この探訪記はすでに2010年に記した。⇒mitake-ogunanomine.pdf

今回見た大岩は既に風化が進み、表面の亀裂も多く、妖気漂う風情でもあるのだが、可能性としては表面が平滑に磨かれた鏡岩であったかもしれない。まだ金毘羅尾根が樹木で覆われていない時期には秋川のほとりの阿伎留神社からその輝きが見えたかもしれない。

阿伎留神社、奥宮、大物主神の大岩、金比羅山、御岳山（男具那峯）これら一体の構造が極めて重要なのである。

平成26年10月5日　古代遺跡探訪家　泰山　記

CopyRight© 2014 by Taizan @ gainendesign.com